

# 私の仕事！私の人生！いかに生きるか？牧場経営者高井裕子さんにきく



本日の語り手  
**ニセコミルク工房店長  
高井裕子さん**

高橋牧場の創業者高橋守の長女として生まれる。札幌で大丸に勤務するも実家の窮状を聞き高橋牧場に戻る。高橋牧場の六次産業化を手掛け、ニセコミルク工房社長となる。現在二児の母として非営利の地域活動活動にも取り組んでいる。

書き手

北海道大学文学院修士二年

細井史

## 仕事とはなんだろう？

仕事とは何だろう？家と学校を往復してきた四半生、就職を目の前にして思う。働く事と生きる事はいかにつながるのか。ニセコミルク工房社長で二児の母、高井裕子さん（旧姓、高橋さん）にお話をうかがうことになった。

場所は羊蹄山麓ニセコ町、夏の熱気もまだ冷めやらぬ九月の上旬である。冠に雲をたたく羊蹄山の雄大で涼しげな姿とは裏腹に私は暑さに打ちひしがれていた。

そこに小走り駆けて来た女性が高井さ

んだ。暑さにもかかわらず高井さんには活力がみなぎっていた。小柄な体のどこにこのような力が隠されているのか。私は高井さんの話に引き込まれていった。

高井さんの経営するニセコミルク工房は高井さんの父、高橋守さんが作った牧場から始まった。最初は牛十六頭、牛乳の年間生産量六トンの小さな牧場だったが、今では牛二六〇頭、生産量一万トンを誇る大牧場である。現在はただミルクを生産するだけではなく、乳製品の加工と販売も行っており、シュークリームやバウムクーヘンなども生産・販

売している。隣接するレストランもミルク工房の所有する店舗である。駐車場の収容台数は一九〇台、現在はコロナ禍のため例年より来場者は少ないものの、バスに乗ってやってくる団体客の姿もあった。

今も工房は拡張されており、本店の増築とミルクチョコレートの製造が目下企画されている。

## 職場関係一人を観るという事

高井さんの一日は忙しい。朝八時に子供を学校に送り出し、九時過ぎの朝礼までにメー



ル対応や前日の売り上げの処理など事務仕事をを行う。朝礼後には各店舗の手伝いを行い、午後には来客の対応をする。欠席する店員がいる場合は高井さんが代役を務める。仕事が終わるのは閉店の午後六時だ。

従業員の作業を監督し代役まで務める高井さんは工房の仕事を一通りこなすことができるのだが、作業について「わかりすぎていることはよくない」という。

以前の高井さんは自分がすべての仕事をやらなければいけないと意気込んでいた。しかし十年前、子育てを始めた高井さんは自分が子供のことを何でもやることは子供の成長につながらないことに気がついた。「お母さんじゃできないから自分でやってね」と子供に語りかければ子供は自分のことを自分でやってくれるようになる」と高井さんは振り返る。それからは従業員も自分の子供のようによく考えるようになったという。

高井さんは職場での作業について、自分は「かじり」ができる程度であると語る。高井さんが開発したシュークリームも、今作るとなると十五年のブランクのある自分よりも

従業員の方が上手い。高井さんは、「従業員が私を頼るのと同時に私も従業員を頼っている」と話す。

「いずれはみんなが私をぬかして、自分がいなくても店が回ることが理想」であると語る高井さんに私は母性のようなぬくもりを感じた。

## 仕事への姿勢—なにからでも学ぶという事

今でこそ社長としてミルク工房を営む高井さんだが、社会人として駆け出しのころは大丸札幌店で一従業員として働いていた。十九歳の時のことであった。高井さんはもともとカウンセラーにあこがれて通信教育を受けるも挫折、その後カフェで働くことを夢みて大丸に就職したものの、実際には地下の食品売り場にある魚屋に配属されることになった。

望んだ仕事ではなかったが、高井さんは任された仕事をおろそかにすることはなかった。高井さんは「大きい理想ほどくずれやすい」と語る。むしろ自分の選ばなかったこと

をやらせてもらえることは貴重な経験なんだから一所懸命にやらなきゃ損だと高井さんは思った。その結果高井さんは持ち前の張りのある声と快活な働きぶりから、あつというまに大丸の商店の間で引っ張りだこになった。高井さんは魚屋の次に京つけものの店に配属された。魚の解体やぬか漬けを作りといった仕事のすべてが高井さんにとって面白い体験だった。

高井さんは大丸の職場で人間関係についても学んだ。売り場の女性たちのドロドロとした人間関係を目の当たりにした高井さんは「どこに行っても人間関係が万々歳になることはない」と語る。高井さんは社長として従業員の仲立ちをする際には、人間関係の問題は「自分がどうしたいか次第」であると教えている。大丸での経験は経営者として従業員を指導する立場に立った今も生きつづけている。

## 家業―家族と働くという事

大丸に就職して一年余りで高井さんは実家に呼び戻されることになる。念願のカフェ

への配属が決まった矢先のことであった。家業は悲惨な状況であり、「こんな状態でお店が出来るの？」と高井さんは驚き嘆いたという。高井さんは実家を救うためにニセコに戻ることを決意した。

高井さんは小学生の頃から父の牧場の手伝いをしてきた。父も母も朝五時には起きて牧場へと仕事に行き、帰ってくるのは夜の八時だった。幼い高井さんが両親と共にいられる時間は毎日一時間程度であった。親恋しさから、高井さんは小学生になると放課後に牧場で親の仕事を手伝うようになった。高井さんにとって牧場の仕事をすることは当たり前の日常だった。

こうした幼児期からの思い出が高井さんに家業を救うことを決意させたのだろう。

しかし、高井さんが帰った後の牧場経営も家族ゆえの問題を抱えていた。牧場への搾乳機導入を求める長男と昔ながらの人と牛とのふれあいを求める父との間には三年にわたって争いがあった。家族だからわかってくれるはずだという気持ちは妥協を許さない対立につながった。最終的には父が折れて兄

に将来を託すことで問題は解決した。高井さんも「父の生きているうちは父の大好きな牧場で元気に働いてもらいたい、そのためには牧場をつぶすわけにはいかない」と今年六九歳を迎える父への思いを語る。

高井さんが兄と弟の間を取り持つなかでつちかった人間力は、現在の職場関係の調整に役立っているという。「兄と弟には心から感謝していまーす!」。話をうかがっている



高橋牧場より見た羊蹄山  
青く高い空が広がっている。  
北海道の自然が高井さんの感性  
を育てたのかもしれない。

私の背後を通り過ぎた長男に向かって高井さんが呼びかけた。「家族だからこそその深いつながりが牧場の経営を支えているということですね」との私の問いかけに、高井さん

はにっこりと笑って親指を立てた。

## 福利厚生から地域活動まで

### ーとにかくやってみるといふ事

高井さんは牧場の仕事だけでなく、地域活動も行っている。始まりは会社の福利厚生として始めた託児所であった。

牧場では多くの女性従業員が働いていた。しかし、牧場での仕事の多い土日祝日に子供を預かってくれる保育園はニセコになかった。そのため、出産を機に自主退社する従業員が多数に上っていた。高井さん自身も産後、託児先がないことに危機感を感じ、会社で子供を預かる取り組みを始めた。その後この取り組みは他社にも知られることとなり、広い需要にこたえるためにNPO法人化が行われた。

高井さんは託児所を作った後、任意団体「ニセコ子育てママの会」を結成した。「ニセコ子育てママの会」は雪深いニセコの冬、外で遊ぶことのできない子供たちに遊び場を提供するため、四人のお母さんたちが集まって結成したものだ。

高井さんは東京の大手遊具会社の社長に手紙を送り、遊具を無料で貸し出してもらうことになった。しかし、遊具の送料三十万円は高井さんたちの負担となった。高井さんは協賛を募り、四〇万円をあつめ、町からも二〇万円の補助金をとりつけた。イベントは二日間の開催で五千人の町民の内千人が来場する大盛況に終わった。

行政も高井さん等の取り組みを評価し、冬場の遊び場の提供を公費で負担するようになった。現在「ニセコ子育てママの会」は託児所と同様にNPO法人化している。

高井さんはある学生に「町がやるべきことを実費でやって行政にすべて持っていかれることは損ではないか」と聞かれたことがある。高井さんも「ニセコ子育てママの会」の活動を始めた当初は重い腰の行政に腹を立てていた。しかし高井さんは、住民の側に必要なことと実現可能な方法があることがわからない限り、行政の人たちも動きようがないことに気づいた。「本当に必要だと思うことはちょっとお金がかかってもしっかりやる。で、人に任せちゃいな」。高井さん

はさらりと答えた。

高井さんは成長した事業をNPO法人に委託することになっている。高井さんにとってはその方が身軽になって新しいことにとりくめるからよいのだそうだ。「自分の為だけに生きている人生はなにか足りない。誰かの役に立てる人生の方が楽しいだろうな」、ちょっと格好をつけた言い方だけど高井さんは恥ずかしそうにはにかんだ。

## 相手あつての自分

### ーすべてに感謝するといふ事

高井さんの半生はすべてが思いどおりにいく理想的な人生ではなかった。しかし、高井さんは嫌な経験を今の自分から切り離して忘れてしまおうとはしなかった。たとえ嫌なことがあっても、その経験があったからこそ今の自分がある。自分に関わる全ての人が今を自分を作っている。こうした関係を高井さんは「感謝」と表現した。

高井さんは子供の頃から歌が好きで、歌を仕事にすることを夢見たこともある。その夢はそのままの形でかなうことはなかった。し

かし、現在高井さんは地元のバンドでボーカルをしている。「お金をもらって仕事としてすることはできないけれど、無償で人のために働くなら自分の好きなことを思うようにやれる」と高井さんはいう。

自己実現のためには、利己心のみではなく、利他心が必要とされるといのが高井さんの人生哲学になるのだろう。「自分はこういう立場で誰に支えられて生きているのかに気づいてみると、世の中深いし面白い」と高井さんは世界の中で生きる楽しみを語る。

高井さんの手掛けた事業は自分の利益となると同時に他人の利益ともなるものであった。自分も楽しく、他人もよろこぶ互恵の関係、そしてこの関係を包み込む「感謝」がよい仕事とよい人生の条件なのではないだろうか。

ニセコを代表する牧場の経営者がどのような人物であるか、近づきたい人物ではないか内心不安に思っていた私にとって高井さんのキャラクターは良い意味で期待を裏切るものだった。

インタビューの終わり際、「高井さんがフ

レンドリーな方でよかったです」と私が感想を伝えると、高井さんは「やるからには楽しい方がいいじゃん」といって颯爽と現場にもどっていった。

(二〇二一年二月二三日)



ミルク工場のシュークリームサクツとした生地の中からとろりとミルクがあふれ出てくる。絞りたてのミルクの味で勝負が決まる他所にない逸品だ。